

欧米左翼によるロールズ『正義論』批判(上)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 恭彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006786

欧米左翼によるロールズ『正義論』批判（上）

伊藤恭彦

一 はじめに

一九八〇年代末からの一連の社会主義体制の「動揺」と「崩壊」は、世界のマルクス主義と左翼陣営に計り知れない衝撃と打撃を与えたと言われている。また、これらと密接に連関する事態として、ヨーロッパをはじめとした先進資本主義諸国における「左翼」陣営の「停滞」や「後退」も顕著である。その上、体制としての社会主義の「死」が、アカデミズムの分野におけるマルクス主義や左翼の「死」へとストレートに結びつくかのように吹聴する思想状況が先進国においては支配的になったかのようにもみえる（「社会主義・共産主義崩壊」論）。例えば、今や「現代思想」の課題は「マルクス主義の瓦礫を越えて」進むことであるとするようなイデオロギー状況が、そのことを端的に示していると言えよう。

しかし、こうした社会主義国の事態や「左翼」陣営の「後退」を一つの背景として、マルクス主義を「再建」しようとする試みも着手され、多くの成果を生み出していることも、また事実である。例えば、現代国家論を主戦場とするいわゆる「ネオ・マルクス主義」や、現代資本主義分析のための新たな理論装置を構築しようとする「レギュラシオン・グ

ループ」も、こうした試みに該当すると言えよう（これら理論の内容には、ここでは立ち入らない）。他方、これらのマルクス主義「再建」の動きと微妙に交錯しながらも、独自の課題意識と方法、スタイルによってマルクス主義を現代的に「再構成」しようとする動きが、八〇年代前後からアメリカ合衆国を中心に展開されている。アメリカ合衆国において、マルクス主義を「再建」しようとするグループは、「分析的マルクス主義」(Analytical Marxism)と呼ばれている。このグループは、分析哲学、リベラリズム政治哲学、数理経済学、ゲーム理論、合理性研究、階層論といった最新の非マルクス主義的な学問成果を旺盛に吸収しつつ、アクチュアルな関心をもってマルクスの原典を「再解釈」しようとするのであるが、その対象領域は、方法論、経済理論、搾取論、疎外論、階級論と多岐に及んでいる。「分析的マルクス主義」と知的交流を図りつつ、「正義」をキーワードの一つとし、マルクス主義の倫理学や道徳哲学あるいは規範的政治哲学を「再建」し、マルクスの中にあつたと考えられる「人間解放」の理念とそれを支える規範を復活させようとする試みも、また、合衆国を中心に活発に展開されている。こうした試みとして、例えば、マルクスの『ゴータ綱領批判』中の諸テーゼを再検討し、それを正義の原理として定式化しようとするカイ・ニールセン (Kai Nielsen)、マルクスにおける「権利論」や「正義論」軽視を批判し、現代リベラリズムの諸成果を吸収しマルクス主義的な正義論構築を目指すアレクサンダー・ブキャナン (Allen Buchanan)、ブキャナンらのマルクス理解を批判しつつ、マルクスを義務論的に解釈し、マルクス主義的正義の四原理を定式化しようとするロドニー・ペッファー (Rodney Peffer) らの仕事があげられる。彼らは、いわばマルクスの「原典」再解釈に力点をおくのだが、他方、新たな社会主義体制を模索しようとする、体制論に力点をおいた政治哲学者もみうけられる。例えば、今日の規範的政治哲学の展開を踏まえ「自主管理市場社会主義」体制を擁護しようとするイギリスのデヴィッド・ミラー (David Miller)、「自己実現」、「自己発達」をキーワードにし、「積極的自由」論の再構成を行い、それを前提とし参加民主主義システムをビルトインした自主管理社会主義モデルを構築しようとするキャロ

ル・グールド (Carol Gould) 等がそうである^⑤。

このような規範的政治哲学の分野でのマルクス主義「再建」の試みが、「社会主義の崩壊」や「マルクス主義の死」といった状況の中でいかなる意味をもっているのか否かをこれから順次検討していくことにしたい。これら理論家の仕事に立ち入る前の準備作業として、本稿では欧米左翼によるロールズ『正義論』^⑥批判を検討していくことにする。というのは、規範的政治哲学においてマルクス主義を「再建」しようとする試みは、そのほとんど全てが、ジョン・ロールズの『正義論』をはじめとした近年の「正義」をめぐる政治哲学的論戦を跳躍台とし、マルクスの原典「再解釈」や新たな社会主義体制モデル構築に向かおうとしているからである。現代において「正義」を語ろうとする者は、その理論的立場がなんであれ、ロールズの正義の理論を必須の検討対象とし、ロールズ批判という形で、自らの「正義論」を構築しようとすると言われるが、このことはマルクス主義においても例外ではないのである。

ところで、一九七一年に『正義論』が刊行されて以降、ロールズの正義の理論はさまざまな批判に曝されてきた。代表的なものは、例えば、ロールズの分配的正義論を「拡張国家」的^⑦福祉国家的正義論と捉え、それが不可避免的に個人の人権を侵害することをロック的財産権論をベースに主張するR・ノジック (Robert Nozick) や、ロールズをはじめとする現代リベラリズムが前提とする「自我」概念の狭隘さとそれがもたらす「共同体」の貶価を剔抉し、「共通善」に基づく「共同体」の再建を唱えるM・サンデル (Michael Sandel) とロミュニテアリアニズム等である^⑧。他方、わが国ではまだあまり紹介されていないが『正義論』刊行当初から有力な批判を展開してきたのが、マルクス主義を基礎とする左翼グループである。本稿では、この左翼グループによるロールズ批判のいくつかを検討するわけだが、その中の比較的初期のもの、すなわち、七〇年代中葉から八〇年代にかけてのものに焦点を当てたい。この時期のロールズ批判を踏まえて前述のマルクス主義的正義論が登場してきているからである。

このような検討を進める意義は、わが国ではマルクス主義や左翼によるロールズ批判やマルクス主義的正義論があまり紹介されていないという事態を鑑み、その穴埋めを図ろうとすることにとどまらない。「現在社会主義国」の一連の事態は、「社会主義の再生は可能か」という包括的な課題の下、「社会主義と自由」、「社会主義と平等」、「社会主義と効率性」そして「社会主義と民主主義」、といった優れて政治哲学的課題を我々に課しているように思える。こうした問題に解答を与えるためには、もちろんマルクスやエンゲルス、レーニンといった社会主義思想の古典的著作の再検討ということが避けて通れない課題であるが、他方で現代という条件の下で、自由、平等、友愛、連帯、効率性といった政治的価値の内実を再検討している現代政治哲学と社会主義思想との真摯な対話もまた必要と考えられる。したがって、本稿の狙いは「社会主義の再生は可能か」あるいは「社会主義と民主主義」というスパーテーマに連なりうるものである。他方、社会主義がたとえ「崩壊」し、マルクス主義が「死んだ」としても、現実の資本主義下での数々の不正義（しかも、それはグローバルに拡散している）が消滅するわけではない。例えば、未曾有の「経済大国」となった日本資本主義において、その「豊かさ」を支えているのが独特の「企業社会」的構造であり、この構造下で過労死、家族の崩壊、教育の荒廃といった無数の「不正義」（ここで言う「不正義」は直観的な意味である）が発生しているのである。こうした日本の状況を正義論的にいえば、「豊かな」果実の分配を調整し、「生活大国」化を果たすといった狭義の分配的正義（経済的な財の分配）が問題なのではなく、まさに過労死等が発生させている労働現場の改革（それは同時に「豊かさ」の質をも問い直すこととなるが）といった生産的正義を含む広義の分配的正義（政治的・社会的価値の分配）が問題なのである。このような現実の資本主義下での不正義を批判し、その克服の方途を探ることも現代正義論に課せられた重要なテーマであると思える。したがって、資本主義体制のトータルなしかも透徹な科学的認識をベースに一貫した批判的スタンスを維持してきたマルクス主義との対話の中からこそ、資本主義批判とその問題点克服のための正義論構築が可能となると思えるの

である。

以上のような意義をもつと考えられるマルクス主義的正義論の検討のための予備作業として以下、ロールズ批判を見ていくことにしたい。¹⁰⁾最後に本稿での「左翼」という言葉の使い方について述べておく。本稿で取り上げるロールズ批判者は、もとより一枚岩ではない。そこで「左翼」という言葉の使い方ともそう厳密なものではない。例えば、厳密な意味でマルクス主義といえるかどうか議論の余地があるであろうC・B・マクファーソン(C. B. Macpherson)も本稿では検討対象としているし、世界観としてのマルクス主義にコミットせず、プラグマティックな関心からマルクス主義に接近している者もとりあえず「左翼」として考えている。「左翼」によるロールズ批判として取り上げる者に共通しているのは、ロールズが『正義論』においては、自らの正義の原理では解決不可能とした資本主義か社会主義かという体制選択の問題を、現代政治哲学の焦眉の課題とした上で、資本主義に対して批判的なスタンス(資本主義⇨正義に反する体制)をとり、かかる見地からロールズの正義の理論を批判しようとしている点である。

- (1) 橋爪大三郎『現代思想はいま何を考えればよいのか』(勁草書房 一九九一年)
- (2) 誰をもって「分析的マルクス主義」者とするかは、それ自体検討を必要とする。最も狭くれば、John Roemer (ed.) *Analytical Marxism* (Cambridge U. P. 1986) に寄稿したG. A. Cohen, R. Brenner, J. Elster, P. Bardhan, E. O. Wright, A. Przeworski, A. Woodをもつて「分析的マルクス主義」者とするのがきょう。その各々が対象としている領域は、例えば、コーエンはマルクスの歴史哲学を中心とした方法論とリバタリアニズム(ノジック)批判、レーマーは搾取論の再解釈とその分配的正義論との結合、エルスターは合理性の再解釈とマルクスの原典解釈との結合、ライトは階級論・階層論、ウッズは正義論・平等論と多様である。他方、ペッファーは、①哲学の分析的言語学的伝統に基礎をもち、②マルクス主義の学者で、③マルクス主義、少なくとも社会主義に親近感をもっている理論家をすべて「分析的マルクス主義」者と、相当ラフに定義している。この定義に従うと、クラウス・オッフエ等を含め、欧米のマルクス主義者の多くが「分析的マルク

- と主義」者ゆえなり。(R. G. Peffer, *Marxism, Morality, and Justice* Princeton U. P. 1990 p.9) など「分析的マルクス主義」の批判的検証として以下の文献を参照。David Gordon, *Resurrecting Marx: The Analytical Marxist on Freedom, Exploitation, and Justice* (Transaction Books 1990)
- (3) Kai Nielsen, *Equality and Liberty: A Defense of Radical Egalitarianism* (Rowman & Allanheld 1985), *Marxism and the Moral Point of View: Morality, Ideology, and Historical Materialism* (Westview Press 1989), *Why Be Moral?* (Prometheus Books 1989), Allen Buchanan, *Marx and Justice: The Radical Critique of Liberalism* (Rowman and Littlefield 1982), Rodney G. Peffer, *Marxism, Morality, and Social Justice*, op. cit.
- (4) David Miller, *Market, State, and Community: Theoretical Foundations of Market Socialism* (Oxford U. P. 1989), Carol C. Gould, *Rethinking Democracy: Freedom and Cooperation in Politics, Economy, and Society* (Cambridge U. P. 1988)
- なぜ、現代政治哲学を代表するマルクス主義のサマナーとして以下の文献を参照。Tom Campbell, *Justice* (Macmillan Education 1988), James P. Sterba, *How to Make People Just: A Practical Reconciliation of Alternative Conceptions of Justice* (Rowman & Littlefield 1988), Will Kymlicka, *Contemporary Political Philosophy: An Introduction* (Oxford U. P. 1990)「川本隆史「現代正義論の構図—ロールズ批判を基軸として」『社会科学雑誌』第三三巻第一号 一九八七年)。
- (5) John Rawls, *A Theory of Justice* (Harvard U. P. 1971), 翻訳 矢島鈞次監訳『正義論』(紀伊國屋書店 一九七九年)以下『正義論』からの引用はATJと略記し、英語版、翻訳版、修正版という順にページ数を記す。
- (6) Robert Nozick, *Anarchy, State, and Utopia* (Basic Books 1974), Michael J. Sandel, *Liberalism and the Limits of Justice* (Cambridge U. P. 1982)
- リベテアリアニズムによるロールズ批判、コミュニテアリアニズムによるロールズ批判(リベラリズム批判)を検討した邦語文献としては、例えば、以下のものが挙げられる。リベテアリアニズムについては、足立幸男『政策と価値—現代の政治哲学—』(ミネルヴァ書房 一九九一年)、ノジックについては、藤原保信『二〇世紀の政治理論—(岩波書店 一九九一年)中の「二二 R・ノズイック—最小国家の擁護」、川本隆史「国家はなぜ、どこまで必要なのか—ロバート・ノズイック」(藤原保信「千

葉真編『政治思想の現在』早稲田大学出版部 一九九〇年 所収)、若松良樹「ノージック『アナーキー・国家・ユートピア』(足立幸男編著『現代政治理論入門』ミネルヴァ書房 一九九一年 所収)。コミュニティリアリズムについては、井上達夫の以下の論文・著作を参照。「共同体論―その諸相と射程」(日本法哲学会編『現代における〈個人―共同体―国家〉』有斐閣 一九九〇年 所収)、「共同体の要求と法の限界」(『千葉大学法学論集』第四巻第一号 一九八九年)、「共生の作法―会話としての正義―」(創文社 一九八六年)。コミュニティリアリズムの他の有力な論客であるA・マッキンタイア(Alasdair MacIntyre)の議論を検討したのもとして、森村進「リベラリズムと共同体主義」(桂木隆夫、森村進編『法哲学的思考』平凡社 一九八九年 所収)、旗手俊彦「著書紹介 Alasdair MacIntyre, Whose Justice? Which Rationality?」(『アメリカ法』一九九〇―一)。

(7) 東欧社会主義体制の「動揺・崩壊」という事態を念頭において、「社会主義と民主主義」問題を論じたものとして、加藤哲郎『東欧革命と社会主義』(花伝社 一九九〇年)の特にIV章が参考になる。

(8) 現代日本資本主義社会の優れたトータルな構造分析を行っているのは、渡辺治の『豊かな社会』(日本の構造)〔労働旬報社 一九九〇年〕をはじめとした一連の著作である。日本において「正義」を語る場合、踏まえねばならないいくつかの重要な問題が提起されている。

(9) 「正義」論や規範的政治哲学のみが、唯一資本主義批判の観点を提示するなどとは僭称するつもりはない。前提として、資本主義社会においてはそもそも「規範」なるものがいかなる位置にあるのか、換言すれば、資本主義社会の「規範的」構成という原理的考察がまず第一に問われねばならない。この問題については稿を改めて論じたいが、例えば以下の文献を参照。Ross Poole, *Morality and Modernity* (Routledge 1991)

(10) 本稿は「現代資本主義社会とマルクス主義規範政治哲学」(仮題)と題する論稿のための準備作業である。今後本誌に順次発表していく予定であるが、前述のニールセン、ブキャナン、ペッファ、ミラー、グールドらの議論の紹介・検討を行いつつ、現代資本主義社会における政治的・社会的価値の編成の検討とその組み替えのための予備的考察を果たしていきたいと考えている。

二 ロールズ批判の展開

以下、ロールズの『正義論』が公刊されて間もない時期の左翼による批判の代表的なものを順次みていくことにしたいが、その前に、批判の基本的なスタイルによって、批判者をあらかじめ三つグループに分けておきたい。もとよりこのようなグルーピングは、暫定的な見取り図を描くためのものであり、観点を変えれば、別の整理も可能なことは言うまでもない。

第一のグループは、ロールズの正義の理論は資本主義あるいは福祉国家的資本主義正当化のための論理であって、その意味でロールズは現代資本主義のイデオログであるとするものであり、左翼による批判としては最も常識的なものである（ロールズ＝資本主義のイデオロギー批判）。代表的論客はマクファーンソンである。

第二のグループは、第一のグループ同様、ロールズの理論が資本主義や福祉国家的資本主義正当化の論理であることを承認しつつも、ロールズの正義の理論のある局面を批判的に再構成すれば、それは資本主義ではなくある種の社会主義と結びつかざるを得ないとするものである。つまり、ロールズの正義の理論の徹底化・実質化は、資本主義の拒絶と社会主義の擁護に結合するというものである（ロールズの世界社会主義的解釈）。代表的論客は、ジェラルド・ドッペルト（Gerald Doppelt）、デヴィッド・シュワイカート（David Schweickart）、クラーク・ギンタス（Barry Clark and Herbert Gintis）、アーサー・ディクアットロ（Arthur DiQuattro）等である。

第三のグループは、「はじめに」でふれた人々である。すなわち、ロールズの正義の理論を跳躍台とし、より積極的にマルクス主義的正義論や社会主義体制モデルを構築しようとするものである。

本稿では、以下、左翼によるロールズ批判のオーソドックスな型を示していると思われるマクファーンソンを取り上げ、

その後、第二グループのロールズ批判を検討していくことにしたい(第三グループは別稿で扱う)。

(一) ロールズの正義の理論—資本主義のイデオロギー?

左翼によるロールズ批判の中で、最も常識的なスタイルは、マルクス主義の「原則」や「価値」を基準とし、ロールズの正義の理論を資本主義正当化、あるいは福祉国家的資本主義正当化の「理論」とするものである。例えば、ロールズの社会契約論は現実の社会における権力関係を隠蔽する「上部構造」上の虚偽意識であるとすることはその典型であろう³⁾。また、フランシス (Leslie Pickering Francis) は次のように論じる。ロールズに対する「原理的批判は、諸個人が深く根ざしている共同体における生の充足をもたらす彼らの能力を私有財産制がいかに堀崩すかを評価していない点にむけられる。というのは、彼の正当化のための方法はイデオロギー的であり、合理性についての見解はブルジョア経済学の見解にあまりに近似しているからである」³⁾。さらに、ロールズの議論の中味に立ち入ってそのイデオロギー性を指摘しているものとしてミラー (Richard Miller) の議論がある。ミラーの批判点は多岐にわたるが、例えば以下のように論じる。ロールズの格差原理についての考えは、現実の社会的対立—階級対立を過小評価したものである。支配階級である「最も恵まれた人」が受け入れうる社会的取り決めは、被支配階級である「最も恵まれない人」によって必ず受け入れられえないものであって、「最も恵まれた人」の権力と富に対する要求は、他の人々の要求よりもはるかに鋭敏なものがあるとし、階級分裂社会においてすべての階級が同意しうる正義の原理などというものは不可能であるとする⁴⁾。

以上のロールズ批判は、いわばイデオロギー暴露の常套手段に基づくものだが、こうした批判と同じ見地に立つか否かにかかわらず、ロールズを資本主義のイデオロギーとして批判する左翼の基本的な視点として以下のものが想定される。

① ロールズは資本主義社会にも社会主義社会にも妥当しうる「普遍的」正義の原理を構想しようとしているが、そのようなことは不可能である。なぜならば、正義を含むあらゆる観念は当該社会の下部構造に規定されるものだからである。さらに、資本主義社会を含むすべての階級社会においては敵対する階級間に利益の調和などあるはずがないのであり、あらゆる階級が受容できる正義の原理は実現不可能である。

② そもそもロールズには階級的な視点がないのであり、せいぜい格差原理による「最も恵まれない人」に対する福祉国家的^{II}改良主義的プログラムを正義の名によって要求しているにすぎないのである。

③ ロールズは分配のみを問題としており、分配が生産に依存していることをみていないし、資本主義社会において搾取という深刻な不正義が発生している生産過程を無視している。

④ ロールズが前提としている人間はブルジョア経済学のそれと同じ効用の消費者としての人間である。

⑤ ロールズの第一位社会善は、共同体や連帯といった人間的な善を不当に排除したものであり、リベラリズムの善に対する見方を無批判的に継承している。

⑥ 政治的自由をはじめとした諸自由の有効な行使のためには、経済的な格差の除去が必要であることをロールズは認めていない。

⑦ ロールズが描く正義にかなう「秩序ある社会」がたとえ望ましいものであっても、ロールズにおいては、そこへ到る道筋、すなわち、不正義に満ちた現実社会を改革するための革命論が欠如している。

以上のような視点からのロールズ批判が直ちに妥当するかどうかは議論の余地があるだろうし、たとえ批判が前提とするマルクス主義の「原則」に問題がなく、かつロールズの正義の理論が資本主義や福祉国家的資本主義止当化の理論であったとしても、生産的な議論ではないと思われる。というのは、このようなロールズ批判はロールズの正義の理論をもって

いると考えられる積極的な側面を看過することになると考えられるからである。

ロールズの正義の理論が課題としたことは、近代以降形成されてきた資本主義社会体制のうちに組み込まれてきた種々の政治的・社会的価値（例えば、自由、平等、友愛、効率性等）を、現代資本主義社会（福祉国家的体制下の社会）の諸条件の下で明示化し、かかる諸価値の均衡点を正義の二原理によって示すことであつたと言つてよいであろう。

（確認の意味で）ロールズの正義の二原理を記しておくことにする。第一原理（平等な自由の原理）。各人は、平等な基本的諸自由の最も広範な全体系に対する平等な権利をもつべきであるが、そうした基本的諸自由の体系は、全ての人の同様な体系と両立しなくてはならない。第二原理（格差原理と機会の公正な平等原理）。社会的・経済的諸不平等は以下の二条件を満たすように取り決められねばならない。（a）正義にかなう貯蓄原理と合い容れる形で、最も恵まれない人々の最大の利益となること。（b）機会の公正な平等という条件の下で全ての人に対して開かれている諸公職と諸地位に伴うこと。）

こうした正義の原理の定式化のうちには、第一に現代先進資本主義社会の顕著な特質といえる「多元性の事実」(the fact of pluralism) を視野に入れ、多元的に成立しているさまざま「善き生」の「共存」の条件を探るといふ優れりべらるる課題設定とその解決が意図されているのである。現代社会の特徴が単に「フォード主義的」大量生産と大量消費が生み出す消費社会的生の「多元性」にとどまらず、相互還元不可能な「善き生」の多元的な族生であると言えらるるなら、左翼もまたこの点を踏まえて、資本主義にとつて代わる新しい社会像を構築しなくてはならないことになるであろう。

「多元性の事実」という現代的問題にどう対処するのか、その解決方法はロールズのリベラリズムと左翼とでは一八〇度異なるものとなるかもしれないが、少なくとも両者は同じスタートラインに立たねばならないであろう。別言すれば、社会主義におけるプルーラリズムの問題を真剣に考慮しようとするなら、リベラリズムの課題設定と左翼の直面している課

題とのある種の共通性を自覚しなくてはならないのである。⁶⁾

さらに、第二にロールズの正義の二原理の定式化の過程には、資本主義社会において存在する多くの不平等を解決しようとする意図も含まれている。その「解決」の方法は、確かに制度論レヴェルでは現実の福祉国家に近似した体制を擁護しようとしているが、原理論レヴェルで描かれる「秩序ある社会」（正義の二原理によって有効に規制されている社会）は、一つの協働社会なのであり、不平等解決を福祉国家的所得再分配メカニズムのみに依存させるのではなく、「相互有利的な」協働機構の中に社会の「最も恵まれない人々」をも包摂し、各人に「自尊心の社会的基礎」（the social base of self-respect）を提供することによって果たそうとするものであると言えるのである。ある種の協働協同達成を課題とする左翼もロールズの協働論から学びうることは少なくないと考えられる。⁷⁾

概略的ではあるが、以上のようにロールズの正義の理論の積極的側面を捉えることができるならば、ロールズ批判において求められるのは、マルクス主義的諸「原則」とロールズの理論を単純に対比させ、その非マルクスの側面を拡大し資本主義正当化のイデオロギーとして放擲することではなく、自らの「原則」をロールズの理論と対質させた上で、その「原則」を豊富化させていくことでなくてはならない。現代の政治的価値論としては最良の部類に属すると思われるロールズの正義論との真摯な対話こそが、規範的政治哲学の分野でのマルクス主義「再建」のための豊かな成果を生み出すものと考えられる。

以上のように、ロールズの正義の理論を資本主義あるいは福祉国家的資本主義のイデオロギーと単純に規定することは問題があると思われるが、このような立場からの批判の中にはいくつかの重要な問題を提起しているものもある。その一例がC・B・マクファーンソンのロールズ批判である。さらに、マクファーンソンのロールズ批判は、その後の左翼によるロールズ批判（本稿では後に取り上げる）の基本的観点がおおよそ提出されているとも言える。この意味で左翼のロールズに

対する建設的な批判をみる前に、マクファーンソンの議論に一瞥を与えておくことは意義のあることであろう。

マクファーンソンは『民主主義理論』(Democratic Theory)において、ロールズを「修正主義的自由主義者」(revisionist liberalist)であるとして、ロールズの「モデルは、本質的に自由民主主義的で資本主義的な福祉国家である」と規定する¹⁰⁾。マクファーンソンによると、ロールズは、第一にいかなる資本主義社会の階級分裂も、自由ならびに個人の諸権利の平等と両立しようと想定しており、かつ、第二にかかる社会においては、所得の不平等は効率的な生産に対する誘因として常に必要であり、福祉国家的な所得移転はある階級が他の階級よりもより良い状態にとどまっている範囲内に限定されねばならないと想定しているのである。階級分裂社会を不可避とした上で、資本主義的生産—再生産の軌道(資本主義的合理性)を攪乱しない範囲内で、所得の不平等を是正しようとしているのが、ロールズの正義の理論であるというのである。しかし、そのような想定には本質的に限界が存在するとマクファーンソンは論じる。資本主義的な市場システムにおいては、ロールズが把握した「所得の不平等」だけでなく、「力の不平等」(an inequality of power)が不可避的に存在し、この不平等によってこそ、ある階級による他の階級の支配が可能となっているのである。換言すれば、資本と労働が別個の掌中にある競争的市場システムにおいては、その集中の度合いがどうであれ、すべての資本は他の人々の生活を規制し妨害する力となつてしているとす。資本主義社会における「資本は抽出的力であり、資本所有者の抽出的力は非所有者の発展的力を減退させてしまうのである」¹¹⁾が、ロールズの正義の理論はこの点を認めていないとマクファーンソンは批判するのである。

このようにマクファーンソンのロールズ批判は、ロールズにおける階級的視点の欠如、ならびに市場システムがもつ搾取的性格(もっともマクファーンソンは「搾取」ではなく「力の移転」という表現をしているが)の看過という二点向けられているのである。しかし、このロールズ批判は専ら『正義論』上で言えば制度論、すなわち、正義の二原理によって有効に規制されている「秩序ある社会」を国民経済レヴェルで実現するために構想された市場システムプラス公共部門(効率

性や自由、機会の平等と両立しうる市場システムが正義にかなう取り決めから逸脱することを防止するための公共部門）のみを対象としているものであるといえる。したがって、『正義論』における原理論と制度論の重層的構成を視野にいれたものでは必ずしもないのである（もちろん、このようなロールズ批判の対象の限定性は、『民主主義理論』上のロールズ批判が書かれたのが『正義論』刊行以前であり、『正義論』の制度論のベースになっている論文を批判対象としていることによるのだが）。

『正義論』において、ロールズは正義の二原理を定式化した上で、この原理によって有効に規制されている社会を「秩序ある社会」として描く（原理論）。この「秩序ある社会」は「相互有利的な」協働社会なのであり、その構成員は自らの「善の構想」に従って自由にさまざまな活動に従事するが、その活動は格差原理によって一つの「協働」へと回路づけられているのである。正義の原理の定式化とこの協働社会の提示が『正義論』の主題であると同時に、マクファーンが批判する市場メカニズムプラス公共部門という制度論の前提となっていると考えられる。確かに資本主義体制にも社会主義体制にも同様に妥当しうるニュートラルな市場という想定や大規模市場社会においてそもそも協働なるものが達成できるのかといった問題、さらには「市場の失敗」のみならず「政府の失敗」ということも問題視しなくてはならないのではといった点を考えれば、ロールズの市場プラス公共部門論には弱点がないわけではない。したがって、マクファーンソンのロールズ市場批判は、それなりに的をついたものではあるが、ロールズの正義の理論を総体として批判しようとするれば、その市場論批判をもう一度、原理論における論点とつき合わせて、その協働社会の質を捉えることが重要であると思われる。

『民主主義理論』におけるロールズ批判は、このようにロールズの福祉国家的制度にのみにむけられたものと言わざるをえないが、原理論に直接関わる批判が一点示唆的に述べられている。それは、ロールズが前提としている「利益」概念

が、「消費者としての人間にとっての利益」というものだけであって、「自らのすべての人間的な潜在的諸力の発揮者・展開者としての人間」にとつての利益を無視しているというものである。¹¹⁾ この点は『民主主義理論』においては詳しく展開されていないが、その後書かれたロールズ批判論文の一つの主題となり、『正義論』上の原理論批判へと連繋するのである。

「ロールズの人間と社会の諸モデル」¹²⁾と題された論文において、マクファーンソンは一方において『民主主義理論』におけるロールズ批判(階級視点の欠如と搾取の看過)を確認しつつ、ロールズが原理論で描いた人間と社会のモデルの問題性を指摘する。

ロールズが描く人間モデルはマクファーンソンによると次のようなものである。ロールズの間人モデルは、自らの生の計画や善の構想を実現し、それらを十全に発展させるために、「第一位社会諸善」の最大化を求める合理的人間である。しかも、この合理的人間は「第一位社会善」の一般的レヴェルが上昇するに従つて、経済的有利性における絶対的上昇に対する欲求を低下させるし、羨望によつて影響を受けないという点で、無限の物質的欲求を求めるものではないのである。この限りで、ロールズの描く合理的人間モデルは、ブルジョア的人間像からはほど遠い存在であると、マクファーンソンはする。しかし、「秩序ある社会」の制度を論じる場合(制度論)には、ロールズの議論は、ブルジョア的人間モデル、すなわち、物質的利益の最大化を求めて行動する「合理的」人間というモデル(『民主主義理論』上の表現を使えば「消費者としての人間」)に依拠し、生産と分配を論じているとマクファーンソンは述べる。したがつて、ロールズにおいては、あたかも合い対立する二つの人間モデルが並存しているかのようにみえるのであるが、マクファーンソンは両モデルの間に矛盾は存在しないと云う。生の計画と善の構想をもつロールズの合理的道徳的個人は、明白に非ブルジョア的であるが、そして、それはT・H・グリーン¹³⁾の道徳的人間概念に近似しているが、「ブルジョア的人間のまさに刻印を帯びている」。

なぜなら、「その人間は個人的自由が高い価値をおき、かつ、階級が生の見通しを決定する階級社会を不可避なものとして受け入れているからである。ブルジョア的人間のみがこのような両特徴を示しているのである」¹³⁾。

このようなモデルの曖昧さは、ロールズの社会モデルにも該当する。ロールズは「正義論」第三部で「秩序ある社会」を論じているが、それをマクファーンソンは根本的に「調和的」社会と捉える。しかし、この「調和的」社会モデルは、ロールズが市場システム論において描いている社会、すなわち、個々人の異なった目的や計画は社会の希少な資源に対して対立し合う要求をかたちづくるという「対立的」社会モデルとは異なり、ここでも人間モデル同様な対立する二つのモデルが並存しているとされる。ロールズはリベラルな市場における自由と共同体の道徳的価値とを求めているが（この点もグリーンと近似している）、「リベラルな市場における自由に固有な搾取的特質を見落としているが故に」二つの社会モデル間の矛盾を発見できないでいると、マクファーンソンは論じているのである¹⁴⁾。

以上のように、マクファーンソンはロールズの制度論上の市場社会モデルにおける階級視点の欠如ならびに搾取の看過を指摘しつつ、そうしたモデルを支える原理論における人間・社会両モデルの曖昧性とブルジョアの偏向を剔抉するのである。マクファーンソンのロールズ批判については、これ以上立ち入らないが、彼によって提示された論点が、その後の左翼によるロールズ批判にも継承され、修正をほどこされた上でロールズの原理論・制度論の批判的再構成がなされていくのである。すなわち、ロールズが前提とする「合理的道徳的人間」モデルは資本主義や福祉国家的資本主義と結びつくのか、それともその適切な解釈は資本主義批判の視点となり、ある種の社会主義と結合するのではないかとか、さらには原理論の適切な解釈は、福祉国家的資本主義の諸制度ではなく、市場をもつ社会主義制度を正当化する論理になりうるといった主張が展開されるのである。

- (1) 左翼によるロールズ批判のサウエイとして、本稿とは視点は異なるが次のものがある。R. Sushila, *Liberty, Equality and Social Justice: Rawls' Political Theory* (Ajanta Publications 1990)
- (2) John McNulty, *The Structure of Marx's World-View* (Princeton U. P. 1978)
- (3) Leslie P. Francis, Responses to Rawls from the Left, in H. G. Blocker and E. H. Smith (eds.) *John Rawls' Theory of Social Justice: An Introduction* (Ohio U. P. 1980)
- (4) Richard Miller, Rawls and Marxism, in Norman Daniels (ed.) *Reading Rawls: Critical Studies on Rawls' 'A Theory of Justice'* (Basic Books 1975)
- (5) 以上は、ブキャナンを参考にじた。A. Buchanan, *Marx and Justice*, op. cit. p.122
- (6) もとより、マルクス主義がこのような「多元性の事実」をそのものとして無批判的に肯定するかどうかは、また、別の問題ではある。現代政治哲学におけるマルクス主義者達においても、この点はマルクス原典「解釈」上のある種の対立として現れているように思える。すなわち、マルクスをアリストテレス流「卓越主義」的に解釈するのか(例えば、リチャード・ミラー)、それとも「正義」概念を中核とする「義務論」的に解釈するのか(例えば、ベニッファー)という対立である。この対立はマルクスにおける「正義」を考えようとする際の最も基本的な問題の一つとなる。他方、資本主義社会における価値の多元性を、単純にブルジョア的「虚偽意識」とか「歪められた意識」として放逐することは、言ってみてもなく問題外の対応である。この場合問題とすべきは、マルクス主義による「善」の把握「善」論の構成であると考えられる。ここには立ち入ることができないが、例えば、エルスターの議論がこの問題について示唆的である。Jon Elster, *Self-realisation in Work and Politics: The Marxist Conception of the Good Life*, in Elster and K. O. Moene (eds.) *Alternatives to Capitalism* (Cambridge U. P. 1989)
- (7) 本稿は筆者の今までのロールズ理解を前提としている。いくつか不十分な点もあるが、以下の拙論を参照していただけると幸いである。「ジョン・ロールズの正義の原理の予備的考察」(『大阪市立大学 法学雑誌』第三四卷第二号)、「ジョン・ロールズの正義の原理と制度論―協働、正義に適う制度そして福祉国家―」(同誌第三五卷第二号、第三六卷第一号、第二号)、「ロールズと福祉国家」(『静岡大学 法経研究』第三九卷三号)。
- (8) C. B. Macpherson, *Democratic Theory: Essays in Retrieval* (Oxford U. P. 1973) p.87~88 翻訳 西尾敬義・藤本

博訳 田口富久治監修『民主主義理論』（青木書店 一九七八年）一四九頁。

(9) *ibid.*, p.92 翻訳一五五頁。

(10) 『民主主義理論』でマクファーンソンが批判対象としているのは、ロールズの『正義論』ではなく、'Justice as Fairness', 'Distributive Justice'といった『正義論』のスペースになるロールズの諸論文である。

(11) 「人間的な潜在的諸力の発揮者・展開者としての人間」なる概念は、マクファーンソンによる西欧自由主義の思想史的検討とその現代的再生のための研究におけるキーワードである。Macpherson, *The Life and Times of Liberal Democracy* (Oxford U. P. 1977) 翻訳 田口富久治訳『自由民主主義は生き残れるか』（岩波新書 一九七八年）参照。このような人間概念と資本主義的市場システムとの対抗という問題は、『所有的個人主義の政治理論』以来のマクファーンソンの一貫したテーマである。マクファーンソンのロールズ批判もこのようなテーマの一部であると考えられるのであり、批判の意義を正確に捉えるためには、マクファーンソンの思想全体の検討とその中のロールズ批判の位置づけという作業が必要となろう。しかし、本稿では左翼によるオールドドックスなロールズ批判として、そしてそのような観点からのみマクファーンソンを取り扱っているので、彼の思想の全体には立ち入らない。なお、マクファーンソンの思想の全体像については、とりあえず、西尾敬義『マクファーンソンの民主主義理論』（御茶の水書房 一九八二年）を参照。

(12) Macpherson, *Rawls's Models of Man and Society* (*Philosophy of Social Science* 3 1973)

(13) *ibid.*, p.346

(14) *ibid.*, p.347

(未完)